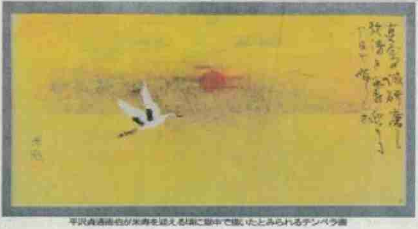
5/13 2023



平沢貞通画伯が米寿を迎える年に獄中で描いたとみられるテンペラ画

帝銀事件（一九四八年）で無実を訴えながら獄中死した画家・平沢貞通元死刑囚（一八九二～一九八七年）が、一九八〇年前後に獄中で描いたとみられる絵画が一点見つかった。平沢画伯を研究する大学院生矢部恵子さん（[illegible]）＝東京都板橋区＝を本紙で紹介したところ、愛知県の読者が「研究に役立てて」と、所有する作品の寄贈を申し出た。刑の執行を恐れ、おびえる日もあったはずだが、作品は獄中でも絵筆を握り続けた画家の自負さえ感じさせる。矢部さんは「だれもが到達できる境地ではない」と話す。（古賀健一郎）

ツルは自由に大空へ

平沢元死刑囚 米寿の獄中絵画

大学院生に読者が寄贈

絵は縦一九・五㌢、横三八・〇㌢のテンペラ画。地平線を照らす朝日を背景に、ツルが舞う情景を、明るい色調で描いている。平沢画伯がしばしば扱ったモチーフや、獄中期の雅号「光彩」があるため、矢部さんは平沢作品に間違いないとみる。

「真実の証明をし尽くし米寿迎うる今日ぞ嬉しき」との短歌も添えられ、すがすがしい気持ちで米寿を迎えた様子がうかがえる。

「絵筆を持ち続ける誇りや、（無実を信じる）支援者への感謝がにじみ出ている」と矢部さん。米寿が数え年で八十八歳の祝いであることや、新春をことほぐような構図であることから、七九年から八〇年ごろに描かれたと推測する。

平沢画伯は大正初期から二科展や帝展に入選し、審査なく出品できる無鑑査のテンペラ画の大家だった。

しかし逮捕後は、作品が捜査で押収されたり、犯罪者が描いたとの偏見が持たれて散逸したりした。一方、獄中の約三十九年間に制作された三千点ともいわれる絵画、色紙、書簡などは、支援者らが預かっているものもあるが、今回の絵画について矢部さんは「初めて目にした」という。

絵を寄贈したのは愛知県春日井市の土井裕子さん（[illegible]）で、東京新聞を発行する中日新聞「この人」欄（三月二日付）に矢部さんが掲載されたことがきっかけだった。土井さんによると十年以上前、交流があった名古屋市の画廊が店じまいする際に、この絵を譲り受けた。時折、保管用の箱から取り出して目を楽しませていたが、「研究に生かすために矢部さんに託した」という。

平沢貞通画伯が獄中で描いた絵について話す矢部恵子さん

都内の雑誌社などに勤めていた矢部さんは、二〇一〇年に「学び直したい」と通信制の京都造形芸術大に入学した。平沢画伯の作品に出合い、「元死刑囚ではなく、画家として再評価したい」と研究を続けている。昨年十一月には、都内で平沢画伯の生誕百三十年・没後三十五年記念絵画展を開き、記録集も刊行した。

今回の作品のことは、秋までにまとめる博士論文に盛り込む。矢部さんは「この絵が獄中から名古屋の画廊にたどり着いたいきさつや、描かれた状況を調査研究したい」と話している。

帝銀事件　1948年1月、東京都豊島区の帝国銀行支店に男が現れ、「近くで集団赤痢が発生した。予防薬だ」とだまして行員ら16人に毒物を飲ませ、12人を殺害、現金などを奪って逃げた。旧日本軍の731部隊、第9陸軍技術研究所（登戸研究所）などの関係者を焦点に捜査が進んだが一転、毒物知識のない平沢画伯が逮捕された。いったん自白したが公判で無罪を主張。死刑確定後も獄中から再審請求を重ね、87年に95歳で死去した。2015年に遺族が第20次再審請求をした。